

由布市の後藤楯根記念「ならねっ子まつり」

国際言語・文化学科

松田 美香

1 児童文化の父、後藤楯根

大分県由布市挾間町出身の児童文学者、後藤楯根（ごとう・ならね明治41年～平成4年）をご存じだろうか。その功績を讃えて、実際に地域の子どもたちの文化を大切にしようという催しが、今年3月8日土曜日に行われた。今年で第7回目を迎えるこの催事名は、「ならねっ子まつり」である。

彼が生まれ故郷の挾間町にいた年月はそれほど長くなかったが、日本児童文学の世界では「父」と呼ばれる偉人であり、その生きざまも潔い。今回の「ならねっ子まつり」で配布された資料によると、幼少期より父や教師の影響を受けて童謡・童話を創作し、それによる受賞も多数あったそうだ。その後は大分県内で教師になったものの、やがて作家を志して上京し、新聞社に勤めながら童謡・童謡の創作活動に入った。

戦後、昭和21年に「日本童話会」を立ち上げ、童話作家の育成に取り組むようになる。そして、その活動に対し、昭和43年に第2回吉川英治賞を受賞。日本童話会は47年間続け、文教大学でも学生を育てた。生まれ故郷の由布市挾間に戻ることなく、会の仕事の途中、84歳の生涯を閉じる。特筆すべきは、彼が受賞で得た賞金は、全て「日本童話会」の運営費用に充てられたということである。生涯自宅を持たず質素な借家住まいであったが、すぐれた児童文学者を多く世に送り出したこと、会誌『童話』を金銭工面しながら発行し続けたことは、ならねっ子まつりで上映された「楯根紹介ビデオ」や会場で展示されたパネル「後藤楯根物語」によって詳しく知ることができた。



写真1 後藤楯根を顕彰する3冊

清貧を貫き、「戦後、混乱のなかで、心があれていくこどもの姿に心をいため、児童文学でこどもたちの心をすくいたい」と行動した姿を現代にとどめ、子ども文化を支えるための「ならねっ子まつり」の体験レポートを、以下に報告する。

2 「ならねっ子まつり」の運営者たち

祭りにはスタッフが必要である。「ならねっ子まつり」の運営は由布市教育委員会社会教育課が担当しているが、実施・運営しているのは「由布市ならねっ子まつり実行委員会」である。委員長は、本学の非常勤講師も担当している後藤弘子氏。事務局長は2年前から、挾間みらいクラブ代表の山月美江子氏が担当しているが、山月氏は活動当初から関わって来られたとのことで、後日お話を伺うことができた。

山月氏の話によると、平成17年に郷土の先哲である後藤楯根の顕彰本を出そうと動き出したが、

その際に単に本を出すだけでは駄目だということになった。後藤樞根の人生、すなわち「今日の児童文化が明日の祖国文化をつくる（吉川英治賞受賞の言葉より）」という精神を広く世間に伝え実践しなければ意味がないと。そこで考え出されたのが「ならねっ子まつり」だったということだ。最初の4年間は、大人向け、子ども向け、青少年向けのそれぞれの後藤樞根に関する本の執筆・出版の期間とし、平成20年2月から「ならねっ子まつり」を始めて、今年7回目を迎えたというわけである。通算すると、今年で11年目になる。後藤弘子氏が、祭りは本が完成したお祝いにほんの数年だけしようというつもりだった。まさか7回目を迎えるまで続くとは考えてもいなかったと、感激もひとしおの様子で語ってくださったのが印象に残った。

後でも述べるが、「ならねっ子まつり」は挾間町の図書館を含む「はさま未来館」のほぼ全館を使用して行われ、絵本の読み聞かせグループ、音楽演奏グループ、郷土芸能団体、茶道、図書館、喫茶、給食、祭り菓子、押し花、おやじグループ、別大生まで、関係者は人数も所属も多種多様な団体、個人にわたる。また、教育委員会や市役所の関係者、小中学校とも連携しているようだ。これらを内外ともに支えるには、考えただけでも相当のエネルギーと労力が必要である。その努力継続が可能であったのは、地域の子どもたちへの愛情があってこそだと、樞根の精神をまっすぐに受け継ぐ大人たちの熱い思いを会場から感じた。



写真2 エントランスホールから見た「ならねっ子まつり」

広い会場を存分に使った祭りなので、同時進行のものもあり、全ての催し物に参加することは不可能だったが、以下、筆者が体験したいいくつかの企画（出し物）についての報告を行う。

3 開会行事

開会は午前10時。3階の文化ホール内で、午前中を使っていくつかの開会行事が行われた。まず、役職者の挨拶に続き、由布市内の小・中学校・高校から応募があった俳句作品の優秀者に対する「俳句優秀作品表彰」、積極的に参加した学校に対する「学校表彰」があった。次に、市役所職員と子ども御神楽による演劇（寸劇）があった。演劇の中に御神楽が組み込まれていたが、大人顔負けの本格的なもので驚いた。劇は時間の制約のある職員たちが工夫を凝らして金太郎やドラキュラなどに扮し、子どもたちの笑いを誘っていた。



写真3 開会式の様子。写真左が後藤弘子氏

その後、日ごろ挾間庁舎近くで活動している「学楽多塾（がらくたじゅく）」という子ども育成サークルの成果発表として、コーラスが披露された。「学楽多塾」の成果は、中研修室内に展示された押し花とエントランスホールでのお茶席でも披露されていた。

4 楽しい給食

昼食は、昔懐かしい昭和時代の給食だった。開店と同時に部屋に入ったのに、瞬く間に席が埋

まっていく。写真の「ならねっ子ランチ」は、カレーライスにフルーツポンチのセットメニュー。別府大学の学生（午後に「おはなしのへや」で出番がある）と筆者は、後藤弘子氏にすっかりご馳走になってしまった。給食を担当しているのは、食生活改善推進協議会と生活学校男性料理教室の大人たち。広いフロアを、かなり高齢と思われる方がきびきびと給仕をする姿は、見ていて気持ちがいい。カレーもフルーツポンチの組み合わせもよく、おいしくいただいた。

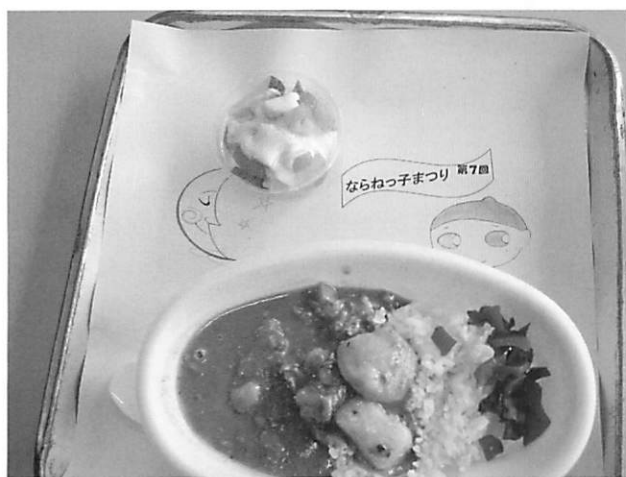


写真4 楽しい給食「ならねっ子ランチ」

山月氏によると、祭りをしようと思い最初に声を掛けたのが、食生活改善推進協議会だったそうだ。「食べ物がないと人が来ない」との確信からだそうで、折しも子どもへの食育が叫ばれ始めた頃であり、後藤樞根が食べたであろう昔の給食をみんなで食べようということでメニューが「学校給食」に決まったという。祭りは地域を巻き込んだもの、文化の香りのするものでなければならぬという後藤氏と山月氏の思想がよく反映されている企画である。近くのテーブルで楽しそうに食べる親子や子どもグループを見ていると、日々の喧騒を忘れ、次第に子どもの視点に戻っていくような錯覚を覚えた。

5 お茶席

後藤氏に誘われて、次にエントランスホールのお茶席に参加した。先に紹介した「学楽多塾」のサークルのひとつで、赤い毛氈を敷いたベンチが

いくつも並び、可愛らしい着物を着た子どもたちが茶菓子とお茶を順番に運んで来る。祭りを始めた当初はほんの数名が着物を着て参加していたそうだが、次第に親たちが着物を調達して来るようになったとのことで、この日はその場にいた子どもたち全員が着物姿であった。お茶を運ぶ順番を間違えたり挨拶がごちなかつたりはご愛嬌で、こぼさぬようにと真剣に運び、運び終えてほっとした表情で奥へ下がる姿が何とも愛らしかった。

このような、本物のお茶席ではできない、ゆるやかな茶道の練習の場としても、日ごろの活動の成果を確かめ親や知り合いに見てもらおう晴れ舞台としても、このお茶席は非常に効果的な企画になっていると感心した。さきほどの給食も、お給仕は子どもにさせたらどうだろうかなどと考えたが、おそらく給食は昭和世代からのプレゼントなのだろうと納得した。お茶席については、8の「まとめ」でも考察する。

6 おはなしのへや

午後からは、今回一番期待していた「おはなしのへや」に向かう。プログラムを見ると、ストーリーテリング(朗読)、お話音楽、科学絵本、ペープサート、大型絵本、紙芝居と盛りだくさん。午後も幼児向けのプログラムがあったのだが、それは開会行事と重なっていて見るができなかった。

別府大学の学生の出し物はビデオ撮影も行った。学生たちは、後藤氏が担当する「図書館総合演習」の教え子たちだ。緊張よりも楽しみにしていると言う。出番まで1時間程度、館内の他所で練習して本番に臨んだ。

この「おはなしのへや」午後の部だが、結論を先に述べると、前半はうまくいったものの、後半には難しい状況になってしまった。出演した読み聞かせボランティアは旧挾間町、旧庄内町、旧湯布院町のそれぞれ別のグループだ。旧町(グループ)によって、「おはなし」の取り組みがかなり違うので、あえてそれぞれが独立して発表するスタイルをとったそうだ。その結果、いい意味で盛りだくさんだが、実際にはかなりの長丁場になっ

てしまった。音楽やビジュアルを取り入れたものから本格的に読んで聞かせるものまで、読み聞かせと言ってもさまざまなスタイルがある。始まりは、エントランスホールで行っている「ポップコーンと綿菓子」に行列ができてしまい、なかなか子どもたちが集まらない。それを待つことにしたため、しばらくは何も始まらなかった。やがて少しずつ集まってきて、子どもたちがカーペット敷きの床に思い思いに座ると、まずストーリーテリングが始まった。その後、音楽、科学絵本、ペープサートとひとつの出し物は短く次々に進んだが、床に座る習慣がほとんどなくなっている子どもたちには、同じ姿勢でいることが次第に辛くなってきたようだ。別大生のペープサートは、人形たちの動きがリズムカルかつ大きく、読み方ははっきりしていて、子どもたちも話を楽しんでいたようだ。後半の大型本『給食番長』は方言の掛け合いが面白く（博多弁を大分弁に置き換える作業をしたそうで、準備が大変だったと思う）、かなり長い話だったが集中して聴いていた。ところが、それが終わった途端、急に会場がざわざわとし始めた。出ていく子どもたち。大型本と言っても会場の後方からでは細かい部分はよく見えないため、筆者もかなり疲労を感じた。しかし、まだ紙芝居が残っていたのだ。西洋の有名なお話とので、重厚な紙芝居の枠が使われており、ストーリーも長く複雑なものだった。それだけに、子どもたちがざわつき出したことが悔やまれる。

「おはなしのへや」は長細い部屋で行われている、人の出入りが目立つ。読み手の方は気を悪くする様子もなく読んでいたが、どこかで一度休憩を入れて、子どもたちも入れ替えるようにしたら良かったのではないかと思う。お祭りの雰囲気とじっくり読み聞かせるお話の雰囲気の、組み合わせの問題もあるだろう。進行者が最後にゴム遊びなどをして盛り上げて終わったが、この読み聞かせの企画には改善の余地があると感じた。

7 由布市立図書館（みらい館内図書館）の出し物

さて、後藤楢根は「児童文学の父」と呼ばれた

と紹介した。児童文学といえば本であり、図書館である。この祭り中、図書館入口でブック・リサイクルを行っていた。複本や劣化などで廃棄処分となる前の本を、無料で分けてくれるというもので、いくつかのワゴンの中にはさまざまな分野の本が背表紙を向けて並べられていた。少しの時間本を見ていたが、結局一冊ももらわなかった。わずかな時間（他の出し物に行かなければならないので）で自分の興味ある分野の本を探すのは難しい。もし、書店のポップのように司書の方たちのお薦めなどの情報があれば、本をもらわなくても、係りの司書の方と会話くらいはできたのではないかと思う。本をきっかけに、まずは本について語る場を作るのが、祭りの場にふさわしい図書館の関わり方ではないだろうか。もっとも当日も図書館を開館している都合上、祭り自体にあまり関われないという事情もあると思う。しかし、演劇で「もっと児童文学を読みましょう」というメッセージを強烈に発していたのに比べると、図書館からの情報量（メッセージ）があまりにも少ないのが気になった。館内には入らなかったが、館内で催しがあったとしても宣伝が足りないように思う。祭りの側にももっと情報量がほしいという意味である。



子どものためにすべきこと -まとめにかえて-

後日、関係者で反省会を行い、筆者が感じたのと同様の課題を突き付けた方もいたそうだ。それを受けて、次年度にはより良い祭りを企画・運営するつもりだと、山月氏は明るく熱心に語ってくださった。そこで「ならねっ子まつり」のモデルになっている行事はあるかと尋ねると、「玖珠町の童話祭は常に意識している」とのことだった。また、秋に同じ旧挾間町内で行われている「きちょくれ祭り」も相方として意識しているそうだ。「きちょくれ」とは大分方言で「来ておくれ」である。出発は農村の収穫祭だったが、今では商業関係の出店も多く、規模は大きいが地域の特色は薄れがちになっているのが心配だという。

祭りとは、その歴史をざっと振り返ってみて

も、神仏と人間の交歓であり、収穫の喜び・感謝の分け合いであり、偉人を讃える場であり、男女の会合の場であり、つまりは社会の中の「人と人との出会い」を演出する舞台装置の役割を果たしてきたと言える。有名で伝統的な祭りにはシンボリックな神や偉人が存在し、関係者は、その祭りのために1年を過ごすとも言われている。全国にテレビ放送され、その祭りのために宿泊者業も潤い、地域も活性化される。



写真5 事務局を担当するNPO「はさま未来クラブ」理事長の山月美江子氏

しかし、そのような祭り以外にも、地元の氏神さまや商店街で行われている「その土地に住む人のための祭り」がある。また、各大学では、大学祭がある。一時は好景気に後押しされて盛り返したり、あらたに作り出されたりしたもの、依然として景気低迷の昨今では、これらはおおむね衰退傾向にあるのではないだろうか。人口が激減してしまい、神輿の担ぎ手がない、実行委員になり手がないなどの事態を受けて、祭り終了や終了間際になっているものも散見する。

そういう現在の状況の中で見ると、「ならねっ子まつり」は集客力、内容ともに盛況であった。祭り全体を見れば成功を取めていると言える。筆者がこれまでに述べた課題は、より良くするにはという提案である。今回初めて参加してみて、館内を見た町民たちの姿に「今日の児童文化が明日の祖国文化をつくる（後藤植根の言葉より）」という、大人の意気込み、子どもへの奉仕の精神が感じられ、頼もしく感じたのも事実である。ただ、インタビューしてみて、後藤弘子氏と山月美

江子氏の守備範囲があまりに広いことが気になった。

「ならねっ子まつり」での大人たちの奮闘を見ていて、子どもという存在は、ただ与えられることに我慢できるのだろうかという問いも浮かぶ。そのヒントになったのが、5で述べた「お茶席」である。そこでも述べたが、当日の重要な労働である茶菓の給仕を子どもたちに委ねることによって、大人たちも少し余裕ができ、子どもたちにとっては「大人と同じ体験」ができ、その子の親にとっては普段見ることのできない「我が子の晴れ姿」を見ることができる。祭りを支えるスタッフとして働いた体験は、教室では得られない貴重なものであるし、継続して参加することによって、その子自身もスキルアップし、祭りの質向上にもつながっていく。

子どもに責任ある仕事をまかせると内容によっては、取り返しのつかない失敗やトラブルの生じるおそれもあるが、それを恐れていつまでも子どもをお客様として扱っていても、子どもが大人になりきれぬまま成長してしまう。それでは、現代日本社会の教育と同じである。そんな風潮と決別し、後藤植根の精神の本当の意味での継承を願う大人たちならば、思い切って子どもを使い、子どもにとっても今以上に刺激的な、成長の区切りとなるような祭りにしていくという方向に舵を切るべきだろう。すでにその萌芽は「お茶席」で見られたし、「学楽多塾」という母体があることで、見通しは明るいと思う。

最後に、数年後を見据えれば、後藤弘子氏と山月美江子氏の両名に続く人材の育成が望まれるが、そのためにも社会全体の機運が変化し、このような取り組みがより高く評価され、支援される社会こそをまず望むべきだろう。